

令和7年度 府中町立府中中央小学校 学校自己評価表【当初評価】

学校教育目標	<b>自ら伸びる</b> 「問い直し」を大切にして、教育活動に山場を創り、「生きた言葉」で自覚化して、他者と関わり協力して乗り越えていく	経営理念 ミッション 子ども観 ビジョン	<b>「学校(地域)は子どもが育つ土壌である」(自ら伸びる意思の形成をなす土壌)</b> 【使命】地域と共に児童も大人も共に成長していく機会・場を創造する学校 【子ども観】子どもは発達の当事者であり、未来の大人として敬意を払うべき存在 【経営展望】「教師こそ最大の教育環境」を自覚し、日々の教育活動の中に子どもを見つめる“まなざし”の研鑽
--------	---	-------------------------------	--

ビジョン (中期経営目標)実現に向けての現状(進捗状況)と今年度の位置付け	本校は、この4年間、「自ら伸びる」を学校の方向目標とし、児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく教育活動を創造してきた。昨年度は、経営理念「学校は子どもが育つ土壌である」を追求していく学校として、「本校は子どもをどのような存在として見るのか」という“子ども観”を明確にしてスタートしたが、中間評価の時点で「教師がめざす姿を子どもに当てはめようとしているのではないか」との課題が見えてきた。これは、本校の求める「(教育活動の中に)一人一人の発達の可能性を見出しながら、学級・学年・学校での関わりの中で、自らの根っこを太らせていく教育」をねらっていくための本質的な課題であると捉えた。それゆえ、後半は、この課題をより意識しながら日常の教育活動を行った結果、「教師がめざす姿を子どもに当てはめようとしている」という課題が克服されたとは言えない状態ではあるが、教師自身の子どもや環境への目の向け方、捉え方、考え方が少しずつ変容してきた。たとえば、「すぐに目に見える成果を求めず待つ姿勢を大切に」「子どもの言葉を丁寧に受け止める」「自分の見取りを他者の見取りに照らして考える」などである。このような“たくさんの可能性の種をもつ子どもの芽を引き出し、伸びる手助けをしたい”と願う教師の“まなざし”の研鑽は、本校のビジョンである「教師こそ最大の教育環境」に深く関わる教職員集団の学習の核であると考え。また、これらの教師の“まなざし”を問い直しつつ、子ども主体となる話し合い活動等を意図的に仕組んでいく中で、学級への適応感が向上し、合意形成をしながら自分たちで暮らしを創ろうとする子どもが増え、学級づくりの基盤である支持的風土は出来てきた。しかし、学習集団として成熟していくためには、失敗を許容し合う“やさしい”関係性が構築された支持的風土を創って終わりではなく、自分たちが本当に追求したいことに自分をかけることのできる“集中のかかる学級”へとフェーズを上げていく必要がある。失敗したり、思いや意見がずれたりコンフリクトが発生した時こそを問い直し(探究)の契機とし、互いの考えを交流させ、授業や行事の中で“学びの集中感・緊張感”を高めていくことが「自ら伸びる」意思を形成することにつながると考える。このことから、今年度は、教師が子どもたちの中にある顕在化していない“ずれ”を感じ取り、働きかけることができるかどうか意識を向け、教師の“まなざし”の研鑽を図り、一人一人の子ども言葉や態度の奥にある感じ方・思い方・考え方を謙虚に見取り、それらが学級の関わりの中で深化していくことで、次第にそれらが学級の感じ方・思い方・考え方となっていくような学習集団へと成熟させていく。そして、子どもの育ちを喜び合う暮らしを創りながら、教師の有りようを問い直していくことで、より深く、経営理念「学校は子どもが育つ土壌である」を追求していく。
--	---

学校経営の柱に係る考え方

a 「生きた言葉」が生まれる学級づくりを支える学年経営(学年経営力)	学級・学年づくりが「自ら伸びる意思」の形成につながるには、日々の教育活動に子どもたちがどう心を寄せ、重ねているかを見取る教師の“まなざし”が大切である。そこで、今年度は「じまんの俳句」の活動を学級で行うのではなく、“暮らしの中で「じまんの俳句」が生まれる学級を創る”との考え方に転換していく。具体的に言うと、学級活動を重ねながら、学級を語りたくなる場、聴いてもらいたくなる場と意味付け、子どもたちの願いが凝縮していくところに価値を見取り、“その学級の良さ・価値(学級らしさ)”を追求する学級目標(方向目標)と日々の暮らし(体験)を充実させていく「はちの子の心得」(体験目標)を連動させ、「じまんの俳句」に顕れる“その子や学級の良さ・価値(その子らしさ・学級らしさ)”を問い直し、高めていく。そのために、各学級の子どもが心を寄せていることを見取り、価値ある人・もの・こと(材)との出会いをいかに支援できるかを学年団で検討を重ねていく。
b 「問い直し」のサイクルを意識した授業づくり(教師の授業力)	学びの創造が「自ら伸びる意思」の形成につながるには、教師が一人一人の子ども言葉や態度の奥にある考え方を丁寧に見取り、「発達の可能性」を見出していく“まなざし”が大切である。教師はその“まなざし”をもって学級活動(柱a)や行事(柱c)を授業構想に生かしながら、授業の中で子どもが本当に追求したい課題や問題を見定め、子どもの失敗や思い・考えの“ずれ”といったコンフリクトを問い直しの契機として仕組み、子どもたちの考えを引き出し、また、子どもたちから出た考えを打ち砕いたり、発展させたりしていくことによって、子どもたちが自分をかけて考えを追求し、“自分らしさ”をつくり出していく集中感・緊張感を体験する授業づくりを追求する。
c 自己認識を問い直す行事づくり(児童自治)	行事の創造が「自ら伸びる意思」の形成につながるには、教師も子どもも「めざす姿を子どもに当てはめようとする」のではなく、「今どこにこの子の主体を確立していく可能性があるか」を子どもの取り組み姿の内に見取っていく教師の“まなざし”が大切である。そこで、学級会や学年総会(柱a)、日々の授業(柱b)、地域行事等(柱d)で培った“子どもの内面”がその子らしく表現され、表現することで更に“その子の内面”が創られていくような行事を子どもと共に創造していく。それにより、子ども自身が立ち向かうものを自覚し、「自らの殻を破り成長したい」との切実な願いが醸成されていくような“集中感・緊張感”の高まる過程を重視して、“その子らしさ”“その学級らしさ”“その学年らしさ”が大切にされる児童自治を支援する。
d 児童や大人の集いが充実する環境づくり(地域との協働)	環境の創造が「自ら伸びる意思」の形成につながるには、教職員だけでなく、子どもを取り巻く保護者や地域の大人たちが、互いの子どもを見る良き“まなざし”を交流し、その思い・考えの“ずれ”といったコンフリクトを契機に、“子ども理解を学び合う関係”に成熟していくこと、つまり、本校が“子どもを真ん中にした地域づくり”の核となっていくことが大切である。そのために、子どもが学校で学んだことを地域で発揮できるような場を学校と地域が協働して創造し、そこで見られる子どもの姿で大人が交流することを契機にして“子どもを取り巻く大人たちも学び合える生涯学習の場”を醸成する。

評価計画(中期経営目標を設定して1年目)

A 中期(3年間)経営目標	B 短期(今年度)経営目標	C 目標達成のための方策	主な成熟度		現状	D 評価指標	目標値(%)	E 評価結果			
								10月		2月	
								達成値	評価	達成値	評価
a 支えを生きた言葉づくりが生まれる学級	団俳暮づくらしの生中まじり学習集	・学級目標と「はちの子の心得」を連動させ、“その学級らしさ”を追求する。  ・「じまんの俳句」で“その学級らしさ・学年らしさ”の耕しを見取り、表現によって追求する。	4段階	その子らしさ、その学級らしさがどう見えているか、何が期待できるか等、学年を超えて交流する教職員集団	・「はちの子アンケート」学級集団の適応感  ・「はちの子の心得」振り返りの記述が学年の目指す姿を現している  ・「教師アンケート」自らの“まなざし”を問い直す教師の割合	80%					
			3段階	学級の子どもが何に心を寄せているのか、価値ある人・もの・こととの出会いについて支援・指導を熟議する学年		80%					
			2段階	自分の感じることを、思っていることを言葉で表現できる学級		90%					
			1段階	語りたくなる、聴いてもらえる支持的風土のある学級							
b 授業づくりの問い直し意識の研鑽	れる中授業・緊張感が生まれる	・「個別最適な学び」で見取った子どもの感じ方・考え方を「協働的な学び」の中で生かし、集中感・緊張感を生み出すための授業研究	4段階	子どもたちが自分をかけて考えを追求し、自分をつくり出す	・「はちの子アンケート」自らの学習を調整しようとする児童の割合 ・標準学力調査の目標値に達していない児童の割合 ・「教師アンケート」自らの“まなざし”を問い直す教師の割合	80%					
			3段階	教師は子どもが本当に追求したい課題や問題を見定め、問い直しを仕組み、考えを発展させていく。		3割以下					
			2段階	教師は個々の感じ方・考え方を見取り、子どもや教材の中から課題等をつくり出し、考えを発展させていく。		80%					
			1段階	支持的風土の中で自分の考えを拓いていく。							
c 行事の自己認識を問い直す	づの自過分り程本位大か切らに主体た形行成事へ	・主体の確立をめざした“あいさつ”の醸成  ・リーダー育成と人と関わる喜びを得る縦割り活動(異年齢交流)  ・授業や暮らしで得た力をつなげ、生かす行事の創造	4段階	他者との関わりの中で自分の存在を実感し、新しい自分を見出していこうとしている。	・「はちの子アンケート」主体感(あいさつ・縦割り活動・行事)  ・「はちの子の心得」振り返りの記述が自己の目指す姿を現している  ・「教師アンケート」自らの“まなざし”を問い直す教師の割合	各80%					
			3段階	子ども自身が立ち向かうものを自覚し、自分が自分の行動の主体であることを認識している。		80%					
			2段階	自分のできる方法で自らを表現し、それを受け止めてもらうことで主体感を得ている。		90%					
			1段階	他者の支援等によって行動(あいさつ)している。							
d 児童や大人の集いが充実する環境づくり	イ大人が学び合うコミュニティ	・地域の人・もの・こととつながる教育活動の創造(全学年)  ・子どもを取り巻く保護者や地域の大人たちが「子ども理解を学び合う」場の創造  ・学校での学びを地域で生かせる地域と協働した行事の創造	4段階	子どもを取り巻く保護者や地域の大人たちが子ども理解を学び合っている。	・教育活動の満足度(保護者アンケート)  ・地域参加・社会貢献への意欲(6年児童アンケート)  ・大人が集う活動の充実度(地域アンケート)	85%					
			3段階	子どもの学びを発揮できる地域行事を大人たちが協働して創造している。		80%					
			2段階	子どもを取り巻く大人同士が、子どもへの“まなざし”を交流している。		70%					
			1段階	各種便り等を見て学校や子どもの様子を知ろうとしている。							